

幼稚園における運動遊び指導の課題

—幼稚園教諭及び幼児体育指導者による運動指導実態調査から—

桐川 敦子 (日本女子体育大学 講師) 中道 直子 (日本女子体育大学准 教授) 内山 有子 (日本女子体育大学 准教授)

要旨

本研究の目的は、幼稚園教諭及び幼児体育指導者の、運動遊びの指導実態や運動遊びを通して育てたい能力、指導観を調査し、比較検討しながら幼稚園教諭の運動遊び指導の課題、幼児体育指導者との連携のための課題について探ることである。質問紙調査を実施し、幼稚園教諭 292 名、幼児体育指導者 163 名から回答を得て分析した。回答があった園の 54.8% で幼児体育指導者を採用しており、幼稚園教諭と幼児体育指導者では運動遊びを通して子どもに育てたい能力に関してはかなり類似しているものの、指導観に関しては幼児体育指導者より幼稚園教諭の方が結果より過程を重視していることが示された。そして、過程重視度の低い幼稚園教諭ほど、多種の運動遊びを一斉活動場面のみで幼児に体験させていることが示された。また、幼児体育指導者を採用している園の約半数では、彼らが指導する運動遊びの内容やカリキュラムを決定する際に事前の話し合いが行われていないことも明らかにされた。幼児体育指導者を採用する園において、幼稚園教諭と幼児体育指導者がより良い連携・協力をするために、指導観やカリキュラムについて話し合う必要性があることなど課題が提示された。

キーワード：運動遊び、幼児期運動指針、幼稚園教諭、幼児体育指導者、指導観

I. 研究目的

少子化、核家族化、都市化、情報化などの言葉で特徴づけられる今日の社会において、子どもが体を動かす機会が減少している。文部科学省の平成 24 年度体力・運動能力調査報告書(2013)によると我が国の子どもの体力、運動能力は、2007 年の下げ止まりを境に向上の兆しを見せてはいるが、その向上率は緩やかである。また小児肥満、姿勢異常の増加も確認されている。この対応策の一つとして文部科学省は 2012 年に「幼児期運動指針」を作成し、「幼児は様々な遊びを中心に、毎日 60 分以上楽しく体を動かすこと」を提案し、問題解決に取り組んでいる。

文部科学省が遊びを中心に楽しく体を動かすことを提案する背景として杉原ら (2010, 2011) の調査が挙げられる。杉原ら (2010) が幼児の運動能力と幼稚園での取り組みとの関係について調査を行ったところ、一人一人が自由な活動をする遊び中心の園の子どもが、指導者の決めた同じ活動をする一斉保育の園の子どもよりも運動能力が高かったと報告している。さらに、杉原ら (2011) は、遊び志向の高い園の子どもほど、様々な運動パターンを経験しており、これが子どもの運動発達に貢献しているのではないかと論じている。

このように、杉原ら (2010, 2011) は一連の研究から、指導者が特定の運動教材を行わせる一斉保育よりも子どもの興味関心に基づいた自発的な遊びの形での運動経験の方が、子どもの運動発達にとって効果的であることを示した。幼児の主体的な遊びが保育の現場において重要であることは言うまでもないが、運動能力の向上の面におい

てもこれが必要とされているのである。

以上のことから子どもの運動能力を改善するためには保育現場において遊びの重要性が十分に理解され、子どもたちが遊びの中で楽しく体を動かすことができるようにする取り組みが行われる必要がある。しかしながら、改善がまだ緩やかであるということなどから指導、援助方法の検討等さらなる取り組みが必要であると言えよう。

一方、近年、運動指導のみを担当する専門の指導者(以下本論においては幼児体育指導者とする)を企業などから採用する幼稚園がある。この動きは、上記の杉原ら(2010)の提案に沿うものとは言えないものの、採用園は少なくない。柳田(2008)は、幼稚園教諭による運動遊び指導の課題を示したうえで、その解決策として外部講師を導入することは、大人の視点で見たスポーツ文化が導入され、子どもの特性をあまり考慮しない指導が展開される可能性があるとして述べている。幼児体育指導者を採用する場合には、彼らと幼稚園教諭が力を合わせて子どもの健やかな発育を促すために、連携・協力をする努力が求められる。しかしながら、この二者の連携は十分に行われていないように見えるし、二者が連携しうるような共通の価値観を持って運動遊びを指導しているのかどうかなどに関する基礎的なデータもない。

そこで本研究では、(1) 幼稚園教諭による運動遊びの指導実態、運動遊びを通して育てたい能力、子どもの運動遊びに関する指導観などについて調べることで、幼稚園教諭の運動遊び指導の課題を探ること、(2) 類似の質問を幼児体育指導者にも行い、その結果と幼稚園教諭の結果とを比較することで、幼稚園教諭と幼児体育指導者と

の連携のための課題について探ることを目的とする。

II. 対象と方法

1) 研究対象

2014年秋に関東圏内の幼稚園46園に無記名自記式質問紙を送付し、返送を依頼した。幼児体育指導者には派遣先の幼稚園もしくは派遣元の企業より配付、回収を依頼した。

2) 調査内容

回答者の属性の他、幼稚園教諭の正課時間内(保育中)における各運動遊びの指導場面、幼児体育指導者の指導内容、二者の考える運動を通して子どもに育てたい能力(「幼児期運動指針」に基づいて選定)及び指導観などである。また二者に対し、「幼児期運動指針」を読んだことがあるかについても回答を求めた。なお園長には幼児体育指導者の採用の有無や採用、不採用の理由、カリキュラムの決め方などについて回答を求める欄も設けた。

指導観については、藤木ら(2011)の作成した保育観尺度の過程重視―成果重視因子の質問項目を参考に、運動遊びの指導場面における過程重視度を調べる4つの質問項目を作成した(表1)。リッカート評定の軸の両極に2つの考え(過程重視か成果重視)が書かれており、回答者は自らの指導に対する考えがどちらにより近いかを判断するように求められた。各項目の回答に対して、過程重視の考えに近いほど点数が高く(6点)、成果重視の考えに近いほど点数が低く(1点)なるように点数化した。

3) 倫理的配慮

調査協力依頼文に「回答はすべて統計的に処理され、個人の回答のみを扱うことはないこと」「調査への参加は強制ではなく、参加の有無によって不利益が生じることはないこと」「統計的に処理された調査結果は、後日被験者に報告すること」などを明記し、被験者が質問紙に記入をしたことをもって調査への同意を得たこととした。また、本研究は日本女子体育大学倫理審査委員会の承認を得た(承認番号2014-15-2)。

III. 結果

1) 回答園及び回答者の属性

46園中33園より回答を得た(回収率67.4%)。回収を

得た園のうち、国公立園は12園、私立園は21園であった。回答者は、園長31名(男性6名・女性24名・無記入1名)、幼稚園教諭292名(男性10名・女性272名・無記入10名)および幼児体育指導者163名(男性129名・女性32名・無記入2名)であった。

幼稚園教諭のうち幼稚園教諭免許取得者が289名(99.0%)、保育士資格取得者が196名(67.1%)、幼児体育指導者のうち中学校教諭免許取得者が73名(44.8%)、高等学校教諭免許取得者が76名(46.6%)であった(表2)。

2) 幼児体育指導者の採用の実態

園長から回答のあった31園中17園(54.8%)が採用しており、うち常勤採用園が4園(23.5%)、非常勤採用園が13園(76.5%)であった。うち、幼児体育指導者による指導の利点として「子どもが専門的な運動指導を受けられる」「子どもが楽しんで活動できる」を挙げた園が各13園(76.5%)、「子どもが運動能力を高めることができる」が11園(64.7%)、「幼稚園教諭が子どもの体を使った活動についての知識を得られる」が10園(58.8%)であった。

幼児体育指導者採用園には、その指導内容やカリキュラムの決め方も尋ねた。「幼稚園と幼児体育指導者で相談して内容を決めている」が9園(52.9%)、「幼児体育指導者が決めた内容をそのまま実施している」が6園(35.3%)、「幼稚園から幼児体育指導者へ要望を出し、その通りに実施してもらっている」が4園(23.5%)であった。

幼児体育指導者を採用していない14園の園長に対し不採用の理由について回答を求めたところ「日常の遊びや活動の中で運動指導を行っているから」が6園(42.8%)、「子どもの主体的な遊びや活動を重視しているから」が5園(35.7%)、「自園の教諭に運動指導をする知識や技術があるから」が4園(28.6%)などであった。

幼児体育指導者は1週間に平均 4.1 ± 1.8 園で動指導を行っており、1園につき3歳児クラスで平均 30.5 ± 18.6 分、4歳児クラスで 39.9 ± 22.0 分、5歳児クラスで 44.8 ± 27.7 分の運動指導を担当していた。指導している内容としては、マット運動、跳び箱、鉄棒などが多く挙げられた(表3)。

3) 幼稚園教諭の運動遊びの指導場面と指導内容

クラス担任の幼稚園教諭が「自由遊びの時間の中で行っている運動」として固定遊具、鬼ごっこ、サッカー、鉄棒、伝承遊びなどが多く挙げられ、「一斉活動の時間に行っている運動」としては水泳・プール、体操、マット運動、ダンス

表1：過程重視傾向を調べる質問項目

過程重視	成果重視
子どもが跳ぶことを楽しめるように指導する	子どもがうまく跳べるように指導する
子どもがボールを投げることを楽しめるように指導する	子どもがボールをうまく投げられるように指導する
運動に興味を持つように指導する	運動がうまくできるように指導する
子どもが走ることを楽しめるように指導する	子どもが速く走れるように指導する

表2：取得資格

	幼稚園教諭		幼児体育指導者	
	人数	%	人数	%
幼稚園教諭免許	289	99.0	8	4.9
保育士資格	196	67.1	6	3.7
小学校教諭免許	40	13.7	4	2.5
中学校教諭免許	7	2.4	73	44.8
高等学校教諭免許	6	2.1	76	46.6
合計	292	100.0	163	100.0

踊りが多く挙げられた。また「自由遊びと一斉活動の両方で行っている運動」としては鬼ごっこ、ダンス・踊り、縄跳び、リレーが多く挙げられた(表4)。

4) 運動遊びを通して育てたい能力

運動遊びを通して育てたい能力についての回答を見ると、幼稚園教諭と幼児体育指導者のいずれも「丈夫でバランスの取れた体」「意欲的な態度」「危機を回避する力」「運動を調整する力」を上位に挙げた(表5)。

5) 指導観(過程重視度)

過程重視度を測る4項目に十分な内的整合性が認められたため($\alpha = .81$)、4項目の得点を合計し、過程重視得点を算出した(最大24点、表6)。回答者による過程重視得点の違いを調べるためにt検定を行ったところ、幼児体育指導者より幼稚園教諭で得点が有意に高かった($t(263.81) = 4.36, p < .001$)。

次に、クラス担任を持つ幼稚園教諭の過程重視度と、運動遊びの指導場面の関連を調べた。まず、自由遊び場面のみで行っている運動遊びの種目数($M = 3.76$ 種、 $SD = 2.11$)と、一斉活動場面のみで行っている運動遊びの種目数($M = 4.04$ 種、 $SD = 2.44$)を算出した。担任教諭の過程重視得点とこれらの2つの変数のPearsonの相関係数を算出したところ、過程重視得点と一斉活動場面のみで行っている運動遊びの種目数にのみ有意な負の相関があった($r = -.26, p < .01$)。過程重視度が低い担任教諭ほど、多種の運動遊びを一斉活動の場面のみで幼児に体験させていることが示された。

6) 幼児期運動指針の既読

2012年3月に文部科学省より発刊された「幼児期運動指針」を読んだことがある者は、幼稚園教諭135名(46.2%)、幼児体育指導者54名(33.1%)であった。

IV 考察

本研究では、(1)幼稚園教諭による運動遊び指導の課題、(2)幼稚園教諭と幼児体育指導者との連携のための課題を探るために、質問紙調査を行った。以下では、本研究の結果に基づき、上記の2つの課題を提案する。

1) 幼稚園教諭による運動遊び指導の課題

本研究の幼稚園教諭の運動遊びの指導場面と指導内容の調査は、各園に運動遊びの内容についての回答を求めた杉原ら(2010)の調査と異なり、クラス担任を持っている幼稚園教諭に回答を求めたものであり、幼稚園で行われている運動遊びの内容がより具体的に示されたと考えられる。幼稚園教諭の約半数が、一斉活動中のみで水泳・プール、体操、マット運動等の運動種目の指導を行っているとの回答をした。前述の杉原らの調査(2010, 2011)において、

指導者が特定の運動教材を行わせる一斉活動よりも子どもの興味関心に基づいた自発的な遊びの形での運動経験の方が、子どもの運動発達にとって効果的であることが示されている。幼稚園教諭においては遊びを中心として行う保育の意義を改めて認識し、子どもの自発性を重視する運動遊びの指導・援助方法、そのための適切な環境構成について再検討していくことが、課題であると言えよう。

さらに本研究の結果は、過程重視度が低い幼稚園教諭ほど、多種の運動遊びを一斉活動場面のみで幼児に体験させていることを示した。これは相関関係であり、因果関係を表すものではないが、幼稚園教諭がより過程を重視するように視点を改めることが、子どもの運動能力を育むのに効果的な、子どもの自発性を重視する遊び中心の保育を充実させるための解決策になる可能性を示唆している。

2) 幼稚園教諭と幼児体育指導者との連携のための課題

本研究に参加した園の約半数が、「子どもが専門的な運動指導を受けられる」ことなどを主な理由として、幼児体育指導者を採用していた。実際、幼児体育指導者は、幼稚園でマット運動、跳び箱、鉄棒等の専門的な運動を

表3：幼児体育指導者による運動指導内容

	3歳		4歳		5歳	
	人数	%	人数	%	人数	%
マット運動	132	82.5	139	86.9	138	86.3
跳び箱	126	78.8	137	85.6	139	86.9
鉄棒	125	78.1	136	85.0	136	85.0
縄跳び	116	72.5	137	85.6	137	85.6
体操	125	78.1	129	80.6	127	79.4
鬼ごっこ	97	60.6	113	70.6	114	71.3
水泳・プール	95	59.4	109	68.1	109	68.1
ドッチボール	48	30.0	105	65.6	135	84.4
リレー	34	21.3	80	50.0	112	70.0
マラソン	59	36.9	78	48.8	84	52.5
サッカー	45	28.1	78	48.8	88	55.0
固定遊具	40	25.0	47	29.4	47	29.4
ダンス・踊り	25	15.6	24	15.0	22	13.8
伝承遊び	12	7.5	19	11.9	21	13.1
散歩	8	5.0	10	6.3	7	4.4
三輪車	3	1.9	3	1.9	3	1.9
自転車	0	0.0	0	0.0	1	0.6

表4：幼稚園教諭による運動遊びの指導場面と指導内容

	自由遊び		一斉活動		自由遊びと一斉活動の両方		どちらでも行っていない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
体操	4	1.7	149	65.1	40	17.5	36	15.7
ダンス・踊り	18	7.9	98	42.8	80	34.9	33	14.4
水泳・プール	4	1.7	158	69.0	8	3.5	59	25.8
マット運動	15	6.6	120	52.4	18	7.9	76	33.2
跳び箱	6	2.6	91	39.7	11	4.8	121	52.8
鉄棒	87	38.0	42	18.3	70	30.6	30	13.1
縄跳び	58	25.3	22	9.6	80	34.9	69	30.1
サッカー	123	53.7	7	3.1	14	6.1	85	37.1
ドッチボール	32	14.0	23	10.0	52	22.7	122	53.3
散歩	33	14.4	68	29.7	13	5.7	115	50.2
マラソン	7	3.1	59	25.8	18	7.9	145	63.3
リレー	21	9.2	51	22.3	79	34.5	78	34.1
鬼ごっこ	125	54.6	5	2.2	90	39.3	9	3.9
固定遊具	166	72.5	3	1.3	49	21.4	11	4.8
自転車	23	10.0	3	1.3	2	0.9	201	87.8
三輪車	64	27.9	3	1.3	3	1.3	159	69.4
伝承遊び	69	30.1	21	9.2	45	19.7	94	41.0

指導することが多かった。吉田・岩崎(2014)は、本研究と同様に幼児体育指導者が器械体操系の運動を指導することが多いことを示したうえで、幼児体育指導者は運動技術指導重視の指導に偏重しやすい可能性を示唆している。本研究は幼児体育指導者による運動指導の内容を直接検討したものではないが、吉田・岩崎(2014)の結果を考慮すれば、幼児体育指導者には、どのような運動を指導する場合においても技術指導に偏らず、子どもが楽しみながら多様な動きを身につけられるように工夫することが求められるだろう。

幼稚園教諭と幼児体育指導者の考える運動遊びを通して子どもに育てたい能力を比較した結果、二者の考えにはかなりの類似性があり、いずれも「意欲的な態度」「危機を回避する力」などを上位に挙げた。しかしながら、指導観には違いがあり、幼児体育指導者より幼稚園教諭で運動遊びの指導において過程(楽しんで運動をすること)を重視する傾向が強かった。過程重視度が低い幼稚園教諭ほど、多種の運動遊びを一斉活動場面のみで指導しているという本研究の結果を考慮すれば、幼児体育指導者の指導観もまた彼らの指導内容と関連している可能性がある。今後は、幼児体育指導者の指導観と実際の指導内容の関連についても詳細に調べる必要がある。

本研究で明らかにされた大きな問題は、幼児体育指導者採用園の約半数が、運動遊びの指導内容やカリキュラムを、幼稚園と幼児体育指導者が相談して決めていないと回答したことにある。幼稚園教諭と幼児体育指導者が保有する免許・資格の違いは、彼らが異なる専門教育を受けてきたことを示唆している。ゆえに、二者は、本研究で明らかにされた指導観以外にも、子ども観や教育観など様々な価値観の違いがあり、それが彼らの指導に影響している可能性がある。幼児体育指導者を採用する園においては、幼稚園教諭と幼児体育指導者のより良い連携・協力のために、運動

遊びの指導内容について話し合う機会を持つ必要がある。工藤(2015)は、保育カンファレンスを行うことで、複数の具体的手立てを知ることができ、保育実践への対応力が高められ、教師間において互いの専門性を高め合える関係性を作り出すうえでも有効であると述べている。幼稚園教諭と幼児体育指導者が同じ指導観を共有するように努めることが、今後の重要な課題となるだろう。

また、幼稚園教諭と幼児体育指導者が、連携しながら運動遊びの指導を行なえるようにするために、「幼児期運動指針」(2012)の普及を高めることが有効であろう。本研究において、幼稚園教諭、幼児体育指導者ともに、これまでに「幼児期運動指針」(2012)を読んだことがあるという回答は半数以下であった。「幼稚園教育要領」において遊びの意味について確認し、さらに「幼児期運動指針」を通し、遊びを中心として行う運動指導の意義を、園の教員全員で共有できるようにすることは意義あることと思われる。運動能力を高めたいという願いは幼稚園教諭も幼児体育指導者も同じである。両者が相互理解を高め、より良い連携を目指していくことは、子どもたちの成長・発達にも良い影響を及ぼすであろう。

V. 本研究の限界と課題

今回の調査では実際の指導の具体的な内容を調べなかった。今後は幼稚園教諭や幼児体育指導者の具体的な指導内容や、それが子どもの運動発達に及ぼす影響なども含め、詳しい調査が求められる。

謝辞

アンケート調査にご協力くださった皆様に、深く御礼申し上げます。

付記

本研究は平成26年度日本女子体育大学「共同研究」の助成を受けて行ったものである。

(引用文献)

- 1) 藤本 大介、上田 七生、樟本 千里、若林 紀乃、越中 康治、松井 剛太、長尾 史英、山崎 晃. 2011「認定こども園への移行が保育者の保育観に及ぼした影響」梅光学院大学論集, 44, 11-21.
- 2) 工藤ゆかり. 2015「質の高い幼児期の学校教育の実践にむけて-保育カンファレンスを通して-」帯広大谷短期大学紀要, 52, 1-10.
- 3) 文部科学省. 2008「幼稚園教育要領」
- 4) 文部科学省. 2012「幼児期運動指針」
- 5) 文部科学省. 2013. 平成24年度体力・運動能力調査報告書.
- 6) 杉原 隆、吉田伊津美、森 司朗、筒井清次郎、鈴木康弘、中本浩揮、近藤充夫. 2010「幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係」体育の科学, 60, 341-461.
- 7) 杉原 隆、吉田伊津美、森 司朗、筒井清次郎、鈴木康弘、中本浩揮、近藤充夫. 2011「幼児の運動能力と基礎的運動パターンとの関係」体育の科学, 61, 455-461.
- 8) 柳田信也. 2008「幼稚園教師の運動遊びに関する指導理念の調査研究」国際学院埼玉短期大学紀要, 29, 21-26.
- 9) 吉田伊津美、岩崎洋子. 2014「園での運動遊び指導と運動遊び指導に対する幼稚園教諭の認識—園での運動遊び指導に対する満足度と技術指導志向からの検討—」発育発達研究, 64, 18-24.

表5：運動遊びで育てたい能力

	幼稚園教諭		幼児体育指導者	
	人数	%	人数	%
丈夫でバランスの取れた体	155	53.1	73	44.8
意欲的な態度	151	51.7	92	56.4
危機を回避する力	150	51.4	89	54.6
運動を調整する力	125	42.8	81	49.7
友達と上手に遊べる力	124	42.5	57	35.0
健康を維持する生活習慣	114	39.0	28	17.2
体を支える力	111	38.0	56	34.4
有能感(自信)	107	36.6	65	39.9
姿勢を維持する力	57	19.5	15	9.2
感情をコントロールする力	52	17.8	32	19.6
運動を続ける力	49	16.8	55	33.7
豊かな創造力	37	12.7	41	25.2
卒園後も活発に運動する力	33	11.3	34	20.9
脳の発達	30	10.3	35	21.5
その他	5	1.7	3	1.8

表6：回答者別の過程重視得点(24点満点)

	M	SD
幼稚園教諭	18.99	3.18
幼児体育指導者	17.29	4.26